

女王と海賊の披露宴

海賊と女王の航宙記

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画

鈴木理華

目次

女王と海賊の披露宴

5

女王と海賊の新婚旅行

71

女王と海賊の披露宴

その時、ダイアナは自分の点検作業をしていた。点検にもいろいろな種類がある。日常的な簡易なものから、作動を止めて行う精密検査まで様々だ。ケリーとジャスミンは地上に降りて留守だった。ちようどいい機会なので、普段は出来ない生命維持装置を点検していると、悲鳴のような通信が入った。「ダイアナ！」

内線画面に映るジャスミンが血相を変えている。剛胆無比の女王さまが、滅多にないほどの焦燥を感じているのは明らかだった。それどころか、その顔には恐怖すら表れている。ただごとではない。何事かと尋ねる前に、ジャスミンはなぜか片腕にケリーの首をがっちり抱え込んで（百九十六センチの男の首根っこを抱えて固定する芸当は誰にでもできるものではない）絶叫した。

「大至急医療装置を準備しろ！ この男は病氣

だ！ それも重症だ！」

「何ですって？」

人間なら耳を疑ったと表現するところだ。

ダイアナはケリーの健康管理には神経質なくらい（厳密には彼女は神経もないが）気を使っている。

ケリーはダイアナが最上最善の状態で飛ぶための、もつとも重要な部品である。狂いがないかどうかを確かめるのは当然だ。つい先日行った定期検査では何も異常はなかったと抗議しようとしたダイアナを制して、ジャスミンは鬼気迫る表情で言った。

「三十秒前のことだ。この男が何て言ったと思う？」

『結婚式をやらないか』だぞ」

映像にすぎないダイアナの瞳が丸くなった。

「……念のために訊くけど、誰と誰の結婚式？」

「わたしもまさにそれを訊いたとも。『わたし』と『この男』の『結婚式』だと真面目に言うんだぞ！これが病気でなくて何だ?！」

ダイアナはたっぷり十秒、沈黙した。

恐ろしいくらいの真顔で頷いた。

「——了解。たった今精密検査機器を起動させたわ。すぐに戻ってちょうだい」

ジャスミンに首根っこを固められているケリーがげんなりした声で言う。

「……二人とも。ちよつとは人の話を聞けよ」

残念ながら、規格外の妻と非常識な感応頭脳にはこの意見を取り入れる余裕はなかった。声を揃えて訴えた。

「聞いたから心配してるんだろが！」

「そうよ。あなたには精神鑑定かんていの必要があるわ！」

「だから話を聞け！ やりたくてやるんじゃないよ。」

ジンジャーに見せるためだ」

途端、夫を捕まえたジャスミンの腕から力が抜け、ダイアナは大きな安堵あんどの息を吐いていた。

軽く責めるような調子で苦笑する。

「脅おどかさないでよ。それを先に言っちょうだい」

ジャスミンも同意した。

「まったくだ。何かと思っただろうが」

わざとらしい仕草で首筋を撫なでながら、ケリーは大いにばやいたのである。

「俺は時々、本当に女房に愛されてるのかどうか、心配になるぜ……」

通信画面のマヌエル一世は同情を示しながらも、懸命けんめいに笑いを噛かみ殺ころしていた。

「いやはや、それはお気の毒でした」

ケリーのほうは、げんなりした顔である。

「笑い事じゃありませんよ、一世。長年連れ添った女房に節目として結婚式をやらないかと持ちかけて、絞め殺されそうになる夫は共和宇宙広しといえども俺くらいのもんです」

マヌエル一世の顔の笑いがますます深くなる。

「何をおっしゃる。相変わらず仲のよろしいことで結構ではありませんか。お祝い申しあげます」

「本当に今さらですがね。俺としてもこんな面倒は

避けたいところなんです、あのおつかない美人にこの辺で女房の花嫁姿を見せておきませんと、後々何を言われるかわからないですよ」

「なるほど。かの大女優は今でも奥さまのファンでいらっしやるのですな？」

「ええ。俺が言うのも何ですが熱狂的なファンですよ。他にも女房が眼を覚ましてからの知り合いを何人か呼ぼうと思います。中央座標^{セントラル}でやる予定ですので、よろしかったら出席していただませんか」

一世の顔から笑みが消え、複雑な心境が表れた。

「それはもちろん喜んで出席したいところですが、わたしが参ってもよろしいのですか？」

この老人が懸念^{けんねん}しているのは自分の知名度だ。

政界から身を引いて長いとは言え、かつての共和宇宙連邦主席という肩書き^{かたが}はかなりの衝撃^{インパクト}がある。

もちろん顔も知られている。一般人と同席すれば騒ぎになるのは必至だが、ケリーは笑って言った。

「もちろん当日はお忍びでお願いしますよ。ずばり、

そっくりさんということでしょうか？」

思わず眼を見張り、小さく吹き出した一世である。姿は別人のように変わっても相変わらず型破りな人だと感心しながら頷いた。

「なるほど。それは楽しそうですが……。しかし、果たしてわたしが別人でまかり通るでしょうか？」

「そこは一世の演技力に期待しますよ。警備の点は心配しなくて結構、こちらで完全にお守りします。実は黒と金の天使も呼ぶ予定なんですよ」

「おお、それはぜひとも参らねばなりますまい」

表情を引き締めて、元連邦主席は身を乗り出した。

一世はまだその二人に直接会ったことはない。

一度は会いたいと思っていたが、二人のいる連邦大学惑星^{テトラ・ボーン}まで出向けば騒ぎになるのは避けられない。

だからといって、一般人の二人を一世の隠居所^{いんきょじょ}に招くのも仰々^{ぎょうぎょう}しい。

「もう一人、銀の天使も紹介しますよ」

「お氣遣い、痛み入ります」

そこでマヌエル一世はふと思いついたらしい。

「ミスタ・クーア。さしつかえなければ、元主席をもう一人と——いっそのこと現職のそっくりさんも呼んでいただくわけには参りませんかでしょうか」

今度はケリーが吹き出した。

百歳を過ぎてもお茶目な人である。

「それはもう、そちらのご都合さえよければ喜んでご招待したいところですが——もう一人の元主席はともかく、現職はさすがに難^{むずか}しいのでは？」

何といつても、共和宇宙一忙しいはずの人だが、その人物の祖父は微笑して首を振った。

「この星でなさるのでしたら、日程さえ調整すれば何とかあります。ただ、日取りに関してはまことに申し訳ないことに、そちらのご協力が必要ですが」

「結構ですよ。我々はいつでもかまいませんから、そっくりさんの休暇に合わせることに致しましょう。ですが、本当によろしいんですか？」

「はい。ちょうどいい機会だと思います。わたしも先の短い身ですから。今後何かあった時お二方との連絡をどうするか、考えておかなくてはなりません。何と申ししましても、あなたと奥さまは連邦にとつて非常に重要な人物ですから……」

「我々はただの民間人なんですがねえ」

呆^{あき}れ顔^がで言^がつたケリーに、一世は「ほっほっ」と品よく笑うだけで論^{ロギク}評は避けた。

当の『花嫁』にとつても今回の夫の行動は寢耳に水だったので、ジンジャーを呼び出して問いつめた。

「生きている間は一言も言わなかったのに、おまえ、そんなにわたしたちの結婚式に出たかったのか？」

ジンジャーはジャスミンの若い頃からの友人で、ジャスミンとケリーの素性^{すじょう}を知っている数少ない人物の一人でもある。

遠い昔を思い出しながら言^いつたものだ。

「あなたの旦那^{だんな}さまは意外に根に持つ人だったのね。

ほんの百回くらい、ぼやいただけなのに」

「それだけ愚痴れば充分だ」

「あら、三十五年間で百回ならたいしたことないわ。あなたが結婚式に興味がない人なのは知っているし、総帥そうすいだった頃はそんな暇もなかったでしょう。ただ、あなたが眠った後、当時はあなたが死んだと思っていたから、こんなことなら、いつそ結婚式をやっておけばよかったのにと感想を言っただけよ」

「おかげでこっちはいい迷惑だぞ。それより何より、あの男の精神状態を真剣に疑った」

「でしよね。結婚式をやりがるケリーなんて、ウェディングドレスを着たがるあなたと同じくらい違和感があるもの。あなたがそんなことを真面目に言い出したとしたら、わたしも、あなたが何か質の悪い病原菌に脳味噌のうみそを冒されて謔言うわごとを言っているに違いないと判断したでしょうよ」

「わたしもまったく同じことを考えた」

大真面目に頷くのだから薄情な妻である。

ジンジャーは笑って、不思議そうに呟いた。

「それにしても、彼はなぜ今になってそんなことを言い出したのかしらね。あなたが眼を覚ましてから、もうずいぶんになるのに」

「わからないが、あの男には何か計画プランがあるらしい。さつさと場所を決めてきた」

「あら、どこの？」

「それが民家なんだ。セントラルの田舎いなかの」

「民家？ 個人の家で結婚式なんてできるの？」

「地方だからな。家もかなり大きくて庭も広いんだ。結婚式と言っても要は知人を招いての食事会だから招待客もそれほど多くはないし、充分だろう」

手元の資料を見ながらジャスマンは続けた。

「今は空き家あやになっっている。最後に住んでいたのはモリス・ファンショウ。既に故人だな。四年前に七十歳で亡くなっている」

「知っている人？」

「それなら驚かない。あの男はわざわざ家を買って、

荒れていた庭にも手を入れさせて、なるべく当時の姿を再現するようにと依頼したそうだ」

ジンジャーの瞳のすみれがきらりと光る。

「怪しいわねえ……」

「同感だ。あの男は決して口を割ろうとしないが、この家を選んだのには何か理由があるはずなんだ。

——まあ、当日行ってみればわかるだろう」

「あらあら、自分の結婚式でしように。花嫁さんが当日までどんな式場かも知らないでいいの？」

「どうせまともな式にはならないぞ。わたしもあの男も無神論者だからな。聖職者は呼ばない予定だし、結婚指輪の交換も端折る」

もちろんウェディングケーキの入刀もなしだ。

司会もない。婚姻届に署名するわけでもない。

ジンジャーは呆れて言った。

「それじゃあ人前結婚式とも言えないわよ。ただの会食じゃないの」

「最初からそのつもりだが、せめて披露宴ひろうえんと言って

ほしいな。おまえはもちろん来てくれるんだろう」

「当たり前よ。いいえ、わたしもぜひ協力したいわ。まず第一に、あなたの衣裳いしょうはどうなってるの」

「普通にスーツで行くつもりだが……」

盛大な嘆息たんそくとともにジンジャーの非難の眼差しがジャスミンに向けられる。結婚式を控えた新婦とも思えない提案をばつさりと切り捨てた。

「却下」

「……やっぱりか」

「当たり前でしょう。お話にならないわ。わたしはあなたの『花嫁姿』が見たいの。任せてちょうだい。一流の人材に最高の衣裳を用意させるわ」

「それはもつたいない。一度しか着ないのに」

「何言ってるのよ。だからこそじゃない」

「しかしなあ。おまえもさっき言ったように、どう頑張ったところで、わたしにウェディングドレスは似合わないと思うぞ」

「そこを何とかするのが玄人の腕プロよ」

惑星セントラルには四つの陸地がある。

北半球に中央政府が置かれているフラナガン島、

エボン島、南半球にはウエルマー島とリドル島。

どの島も島と呼ばれてはいるが、実は大陸なので、同じ島でも場所によってかなり気候の差がある。

ファンシヨウ邸の所在はリドル島の東部ポレント地方だ。シティとはほとんど時差もないが、都会のシティと違って、牧歌的な田園風景が広がっている。

ジャスミンとケリーが出した招待状は、連名の、「この度ささやかながら結婚披露の宴を催す運びとなりました。お越しいただければ幸いです」

という簡素なもので、出欠の確認もとっていない。来たい人は来てくださいということだ。

当日、現地はさわやかな初夏の気候だった。

晴天に恵まれたが、ダン・マクスウェルの心境は晴れやかとは程遠かった。

（何が悲しくて四十も過ぎたこの歳になって、実の

両親の結婚式に出席しなければならないのか……）

深々と嘆息せざるを得ない。

それでも妙に律儀な彼は礼服を着て、予定の時間に間に合うよう、指示された場所に向かったのだ。

車の外に見えるのはのどかな田舎の風景なので、同乗していたタキが首を捻っている。

「意外だ。あの二人なら宇宙船か何かを借り切って、もっと派手に豪勢にやると思ってたが……」

「俺もそう思った」

「同感だ。なんつうか、ちょっと少女趣味っぽいぜ。パピヨンには似合わないぜ」

口々に賛同したのはトランクとジャンク。つまり

『ピグマリオンⅡ』の乗組員が勢揃いしているのだ。

ダンの思惑としては自分一人でひっそりとして帰って来たかったのだが、招待状に「よろしければ乗組員の皆さんも一緒に」とある上、あの二人の結婚式と聞いて、堅苦しいことの嫌いな仲間たちが乗り気になってしまったのが誤算だった。

三人ともあの二人の素性を知らない。自分たちの船長の実の両親であるとは知るよしもない。

彼らが知っているのは、妻はとてつもない技術ぎりようを誇る小型機の操縦者であること、そして夫のほうは真正正銘の『宇宙うみの男』だということだ。

『ビッグマリオンⅡ』の乗組員にこの評価をもらえる男は共和宇宙広しといえどもそうはいないのである。

自動操縦装置が目的地に到着したことを告げた。

しかし、どこにも建物は見あたらない。

眼の前にあるのは緑に覆おおわれたアーチ型の入口で、「ご自由にお入りください」と手作りの札が掛かり、アーチの向こうは花盛りの庭になっている。

自然の趣おもむきを活かした美しい庭だった。

ふんだんな緑の中に色とりどりの花々が無造作むぞうさに咲き乱れている。一行が緑の小径こみちを進んで行くと、途中で道が分かれた。

矢印やじるしとともに「庭園」「披露宴会場」とそれぞれお手製の案内板が掛かっている。

庭園のほうは一般に開放されているようだった。

ちらほらと人の姿が見えるし、話し声も聞こえる。服装から判断するに、観光客というより、近所の住人たちのようだった。

一行が会場への道を選んで歩いていくと、緑色の瓦屋根かわらやねが見えてきた。大家族が余裕で暮らせそうな大きな家だが、豪邸とは言えない。いわゆる田舎の民家である。小径の途中に閉じた木戸が現れ、行く手を遮さへぎったが、ダンの胸くらいまでの高さしかない木戸なので、向こう側はすっきり見渡せた。

芝生しばふに覆われた緑の庭だった。真ん中に芝生まで届く白いテーブルクロスを掛けた細長い机が置かれ、周囲にいくつかの円卓と椅子が並べられている。

椅子の数から判断すると、だいたい三十人程度の来客を予定しているらしい。

今日の主役の一人の花婿はなむこが、自分は立ったままで、椅子に座った客たちと楽しげに談笑している。

黒服の給仕が二人、せつせと食卓しょくしょくを調えているが、

どちらも小柄で、子どものような体格である。

給仕の一人が木戸の向こうに立つ四人に気づいて走り寄ってきたが、ダンはずいぶん脱力した。

「ジェームス……ここで何してる」

「給仕係のバイト。ヴィッキーが誘ってくれたんだ。時給がいいんだよ。仕事だからちゃんとやらないと。」

——招待状を拝見します」

ダンには律儀に招待状を見せ、乗組員たちは船長の息子に気軽に声をかけた。

「よう、ジェームス！ ちょっと見ない間にでかくなつたなあ」

「ついこの間までどちら歩きだつたのにな」

「よしよ。もう子どもじゃないんだからさ。はい、結構です。どうぞお入りください」

この会話が聞こえたのか、テーブルについていた客たちが立ち上がった。

長年クア財閥で働いていた、今は経済評論家のヘレン・ブランドンと、メルヴィン・クラーク博士、

博士の夫人のプリステインが口々に挨拶してきた。

「ご無沙汰しております、マクスウェル船長」

この人たちとダンとは以前、ちょっとした事件がきっかけで知り合ったことになっている。

その点を踏まえて、ダンも慇懃に挨拶した。

「お久しぶりです」

三人はある種の感慨に微笑みながらダンを見つめ、ジェームスに眼を移した。

「この給仕さんは船長の息子さんですか？」

「ジェファースンさんのお孫さんに当たる子ですね。——まあ、すっかり大きくなつて」

「ケリー。黙っているなんて意地が悪い。そういうことはもっと早くおっしゃってくださいな」

プリステインに非難された花婿は、苦笑して肩をすくめている。

ケリーは光沢のある白い生地のプロックコートを着ていた。シルバークレーのベストを合わせ、胸にピンクの薔薇を挿している。桁外れて立派な体格に、

誰もが美男の太鼓判を捺す人だから実に映える。

この人を前にすると、ダンはいつも複雑な心境に襲われる。自分より若くて、自分より背が高くて、自分よりいい男（客観的に評価するとそうなる）が、なぜよりにもよって実の父親なのかという虚脱感に襲われるのと同時に、この人がかつて宇宙を席卷した海賊王なのかという、何とも形容しがたい思いがひたひたと迫ってくる。

疑っているわけではない。むしろ逆だ。船乗りの間では伝説となったその人物が生きて眼の前にいて、しかも自分の実の父親であるという現実を、未だに受け入れがたくて、戸惑っているのである。

クラーク博士たち三人はそうした戸惑いに加えて、密かな緊張も感じているようだった。

『五年前に七十二歳で死んだ人』と、しかも死んだ当時とは似ても似つかない若々しい姿になった人と、面と向き合って平静でいるのは難しい。

さらに言うなら今の彼らはダンが何者であるかも

既に気づいているのだろう。

ケリーを見、ダンを見、そしてジェームスを見る。彼らの視線には一口には言い表せない何かがあった。彼らにとってケリーが『死んだ人』なら、ダンには『三十年前に死んだと聞かされていた人』であり、ジェームスは『生まれるはずがなかった』子どもだ。三人の妙に真剣な視線が自分に注がれているのに気づいて、ジェームスは面食らいながらもそつなく頭を下げ、タキが感心したようにケリーに尋ねた。「こりやまた立派な花婿だが、お一人とは寂しいな。花嫁さんはどうした」

「まだ中で飾りたててるよ。衣裳係が厳しくてな。髪やら化粧やら、つきつきりだ」

大人の態度として礼儀正しく口をつぐんだものの、全員が、そこまで念を入れても、元があの女じゃあ、たいして変わりやしないだろうと考えた。

もちろん実の息子も例外ではない。

酒杯を載せた盆を持ったリイが家から出てきた。



「やあ、船長。おじさんたちも来たのか」

彼も小さな身体に黒い給仕服を着ていた。口調は全然給仕らしくないが、ダンは元より『ピグマリオンⅡ』の乗組員も、この天使のような少年とは既に顔見知りだったので、気さくに話しかけた。

「今日は相方は一緒じゃないのか？」

「どっちのこと？ 髪が黒いの？ 銀色の？」

「銀色のだよ」

「黒髪の相方もいるのか？」

「いるけど、今日は裏方に徹するって。——おれもちゃんと働かないと。はい、お飲み物をどうぞ」

にっこり笑って盆に載せた酒杯を差し出してくる。

四人は苦笑しながら酒杯を取り、リイは何気なく木戸に眼をやって嬉しそうな声をあげた。

「オデイル！ いらっしゃい」

振り返ってその少女を見た時、最初ダンとは同名の別人だと思った。

まっすぐだった黒髪はやわらかそうな赤毛になり、

無理に大人びた化粧も服装も年相応のものに変わり、可愛らしいピンクの衣裳が実によく似合っている。

父親は有罪判決を受けて今も服役中だが、彼女がそのことに捕らわれていない様子なのは明らかだ。

父親と自分は違う人間だと吹っ切れているらしい。見違えるように明るい笑顔は、今日も一緒に来

ているライナスの影響もあるに違いない。

二人は『ピグマリオンⅡ』一同がいるのを見て、とても喜んで、熱心に話しかけてきた。

「ここで皆さんにお会いできるなんて、よかった。ずっとお礼を言いたかったんです」

「あの時は本当にお世話になりました」

ダンもオデイルのことは気になっていたもので、彼女の変化にはっとした。

新たな杯を持つて出てきたリイも、オデイルが正しい方向に変わったのを感じていたようで、本人に向かつて真顔で言ったものだ。

「そのほうがずっと似合ってる。すごく可愛い」

「ありがとう。今日はシェラは一緒じゃないの？」

「うん。中で働いてるよ。後で挨拶に来ると思う。」

——はい、お飲み物をどうぞ」

二人とも一口飲んで「美味おいしい」と歓声をあげた。

リイは次の盆を運ぶためか、家の中に戻っていき、
《ピグマリオンⅡ》の面々も同じく手にしたままの
酒杯に口をつけて、思わず声をあげていた。

「ほう？」

「こりゃあ、うまい」

こんな席だから甘あまったるいカクテルの類たぐいだろうと思つたのに、意外にもきりつと引き締まった刺激しげきの強い飲み物である。彼らの口には合うが、未成年や年配の客人には強すぎないかとダンが顔をしかめたその時だ。まったく気配を感じなかったのにダンの心境を悟つたかのような声がすぐ背後でした。

「お子さんたちやお年寄りには、ちゃんと軽いのを出してるから問題ねえって。今来たお客さんにも、こういう酒のほうがいいんじゃないかねえの？」

何とも言えない表情でダンが振り返ると、給仕の

服装をしたレティシアが立っていた。

「きみがいるということはヴァンツアーもか」

「ああ、今日は裏方を担当してるぜ。あいつは俺と違ちがつて厨房ちゅうぼうで働いた経験があるみたいだから」

ちよつと待て、とダンは思つた。

ヴァンツアーが（レティシアもだが）お客に出す食べ物を感じていゝとは聞き捨てならない。

その顔色の変化をまた敏感びんかんに察したレティシアが聞きとれるぎりぎりの小声で囁ささやいてくる。

「毒なんか入ってねえって。あいつはただの助手。」

料理人は他にちゃんといるから、そんな顔すんなよ。その料理人からあんたとあんたのお仲間伝言だぜ。赤の他人で押し通せてさ」

レティシアには意味がわからない様子だったが、
ダンは正確に理解して天を仰あおいだ。

「……了解」

思わずちらりと息子を見やる。

ジエームスはまた素早く走って行つて木戸を開け、新たな客人を庭に通している。レティシアが言つたそのお客は礼服を着慣れていないのが一目でわかる、氣むずかしそうな年配の男だった。むつつりとした鬚面がダンを見て、おもしろそうな笑顔になる。

「何だ、マクスウエル船長。おめえも来たのか」
ダンもわざと伝法な口調で答へた。

「あんたも意外と物見高いじゃないか。峡谷の風はどうだい、爺さん」

「おう、相変わらずさ。シーズンオフでなけりゃあ、誰がこんなところまで来るかよ」

ジュゼッペ・ガストーネは辺境の惑星ブラケリマの人間で、腕のいい整備士である。

木戸の向こうから現れた別の客がのんびりと声をかけてきた。

「ひよっとして、そこにいるのはブツカラの峡谷の偏屈爺さんか」

振り返つたガストーネは破顔して言つた。

「おう、ウォーカー船長じゃねえか。まだしぶとく生きてやがったか」

「そりゃあこつちの台詞だ。まさかここであんたの顔を見るとは思わなかつたぜ」

言い返した客はガストーネと同年輩の男性だった。結婚式の来賓なので礼服を着ているが、これまたあまり着慣れた様子ではない。

ガストーネが両者を紹介する。

「《ピグマリオンⅡ》のマクスウエル船長と乗組員一行だ。これは《セシリオン》のウォーカー船長」
「元船長だ。先日、船を降りたんだな。これからは楽隠居さ」

男は笑顔で言い、ダンに話しかけてきた。

「《ピグマリオンⅡ》の乗組員が勢揃いとは驚いた。こつちはしがたない貨物船のもう引退した船乗りだが、よろしく。ファーガス・ウォーカーだ」

「ダン・マクスウエルです。よろしく、ウォーカー船長。こちらは機関士のタキ、操縦士のトランク、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。